

## 「山の上の奥義」

ルカの福音書 9:28~36

### はじめに

今日の内容に入る前に、少し前回のおさらいをしておきたいと思います。

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた…。

9:24 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを救うのです…。

9:26 だれでも、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子もまた、自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき、その人を恥じます。

9:27 まことに、あなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国を見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

ここでイエシュアの語っておられた「いのちの救い」とは、「人の子は多くの苦しみを受け…殺され、三日目によみがえらなければならない」という十字架の死と復活の出来事だけにあるのではなく、イエシュアが「自分と父と聖なる御使いの栄光を帯びてやって来るとき」すなわちイエシュアの再臨、そして地上にお建てになる「神の国を見る」こと、そこに入り、そこに住まうことにあることが示されていました。ですからイエシュアの十字架の出来事は神のご計画のゴール、目標、結論、最後ではなくむしろスタートあるいは通過点なのです。もちろんこのイエシュアの実験は私たちの救いにおいて必要不可欠な出来事ではありますが、神のご計画はそこで終わり、完成ではないのです。「神の国を見る」ことこそがそれであり、イエシュアは初めからこの「神の国」の福音だけを宣べ伝えておられることを覚えなければなりません。

### 1. 八日

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:28 これらのことを教えてから八日ほどして、イエスはペテロとヨハネとヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

イエシュアは「これらのことを教えてから」すなわち救いがイエシュアの再臨と「神の国」にあることを教えるために「八日」ほどして行動を起こされます。この「八日」とは本来、割礼を意味する日数です。聖書で最初にこの「八日」が記された箇所を見てみましょう。

創世記 17:12【新改訳 2017】

あなたがたの中の男子はみな、代々にわたり、生まれて八日目に割礼を受けなければならない。家で生まれたしもべも、異国人から金で買い取られた、あなたの子孫ではない者もそうである。

これは主が「割礼」を受けるようにとアブラハムに命じられたものですが、それは彼とその子孫だけでなく、アブラハムにつながる「異国人」すなわち異邦人「あなたの子孫ではない者」も含まれたものとなっています。この「割礼」とは神のもの、神の所有の民、神の選びの民となることを示すものです。主はアブラハムとその子孫だけではなく、これにつながる、従う、すなわちアブラハムを祝福する者をもその選びの民「神の国」の民として同様に扱われます。「八日」という日数には本来、そのような意味が、事実が指し示されているのです。ですからイエシュアはこれから行うことがイスラエルと異邦人についての神のご計画を示すものであるために、あえてこの「八日」ほどしてから行動を起こされたのです。

## 2. ペテロとヨハネとヤコブ

そしてイエシュアは十二弟子の中から「ペテロとヨハネとヤコブ」を連れて行かれました。これをヘブ林的に解釈するならば「ペテロ」はケファ（ヨハネ 1:42）と呼ばなければならないことを前回お伝えしました。この名はケーフ(קֶפֶז)「岩」という言葉に由来し、そしてそれは「世間からは追い出され…国からむちでたたき出された者たち（ヨブ 30:5.8）」を指し示し、そしてそれは具体的に「踏みにじられた…産みの苦しみにある…娘シオン（エレミヤ 4:27~31）」すなわちユダヤ人、イスラエルの民を指し示し、終わりの時代に、彼らがいかにして苦しめられるかということが指し示された名であるということをお伝えしました。ですからこの時、この場面での「ペテロ」の存在には世の終わりの大患難を通り、その苦しみの中でイエシュアを呼び求め、救い出されるイスラエルの残りの民の姿が暗示されているのです。

ということは「ヨハネとヤコブ」にも他の存在が指し示されているということになります。それを考えてみましょう。まずヨハネ(יְהוָנָן)は「恵む、憐れむ、受け入れる、住む」という意味のハーナン(יְהִי)を由来とする名です。その最初の言及を見てみましょう。

### 創世記【新改訳 2017】

33:3 ヤコブは自ら彼らの先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した。

33:4 エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた。

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

33:6 すると、女奴隷とその子どもたちが進み出て、ひれ伏した。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブすなわちイスラエルがその兄エサウと再会、和解する場面です。ここでイスラエルは自分の「女奴隷とその子どもたち」を指して神がハーナン「恵んでくださった子どもたち」と言い、ここに聖書で最初のハーナンがあります。ですから本来ハーナンという言葉にはイスラエルにつながる異邦人とその子孫に対する神の恵みと憐れみが指し示されており、ここにもまたイスラエルにつながることによって神の選びの民とされる異邦人の姿が指し示されているのです。つまり「ヨハネ」という名にはイスラエルにつながる異邦人すなわち私たち異邦人の教会の存在が表されているのです。

では「**ヤコブ**」についてはどうでしょうか。この名はまさにイスラエルを指し示す名ですね。アブラハムの子孫であり神の選びの民としてのイスラエルの存在がこの名には示されています。私たち異邦人はこれにつながることによって救われるのです。実際この「**ヨハネとヤコブ**」は実の兄弟であり、この事実もまた神のご計画におけるイスラエルと私たち異邦人の教会の「型」たる所以です。では先ほどの「**ペテロ**」すなわちケファに示されたイスラエルの残りの者と、この「**ヤコブ**」に示されたイスラエルとでは何がどう違うのでしょうか。以下の記述を見てください。

#### マタイの福音書【新改訳 2017】

27:50 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。

27:51 すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、

27:52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。

27:53 彼らは**イエスの復活の後に、墓から出て来て**聖なる都に入り、多くの人に現れた。

これはイエシュアが十字架の上で息を引き取られた直後の記述です。「墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。」とあります。これは比喩でもたとえでも誰かが見たまぼろしでもありません。実際に起こった事実として記されているのです。彼らは旧約時代の聖徒たちとも呼ばれる、イエシュアが十字架にかかれる前に死んだイスラエルの民「多くの聖なる人々」です。その「からだが生き返った」と明記されているので、彼らは幽霊ではありません。彼らもまたイエシュアと同様に復活の身体、朽ちない身体、永遠のいのちの肉体によみがえらされたのです。しかし「イエスの復活の後に墓から出て来て」とあるように、復活の初穂であるイエシュア( I コリント 15:20)のよみがえりを待ち、その後で現れています。そして彼らよみがえった旧約の聖徒たち、イスラエルの民は、イエシュアの昇天の際と一緒に天に引き上げられています。実際にはこのように記されています。

#### 使徒の働き【新改訳 2017】

1:9 こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。

1:10 イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。

1:11 そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

これはイエシュアの昇天の記述です。「雲がイエスを包み」とありますが、この「雲」は私たちが普段見ている煙のようなそれではありません。ヘブル的にそれは「雲のような多くの証人たち (ヘブル 12:1)」を指すものです。ですからイエシュアは多くの復活の証人たちとともに天に上って行かれたのです。いかなればこの事実、この出来事はイエシュアによる最初の携拳とも言え、「天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」とあるように、私たちが携拳と呼んで待ち望んでいる

その予表「型」となっています。このように、イエシュアの復活の後に墓から出て来たイスラエルの聖なる人々、まさに復活の証人となった彼らの存在が、ケファ、ヨハネとともにイエシュアが選ばれた「ヤコブ」という名には指し示されているのです。つまりまとめるとこうなります。

- ① ケファ（ペテロ）…大患難時代を通らされるが、地上再臨されるイエシュアによって救い出されるイスラエルの残りの民の「型」。
- ② ヨハネ…イスラエルにつながる異邦人の教会の「型」。(大患難時代開始と同時に携挙されることによって救われる。)
- ③ ヤコブ…旧約時代の聖徒たち（イスラエルとそれにつながる異邦人たち）。イエシュアの復活の直後に墓から出て来た復活の証人たち。

このように解釈するならば、イエシュアがなぜ十二弟子の中からつねにこの三人を選ばれたのかという意味がわかります。彼らの中に「神の国」の民としてのそれぞれの救いの道、プロセス、どのようにして救われるか、「神の国」に入るかという神のご計画が秘められているのです。

### 3. その衣は白く輝いた

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:29 祈っておられると、その御顔の様子が変わり、その衣は白く光り輝いた。

ここでイエシュアの様子が変わり、「その衣は白く光り輝いた」とあります。この出来事をヘブル的に解釈してみましょう。まず「衣」という意味のレブーシュ(שבוע)の最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

49:9 ユダは獅子の子。わが子よ、おまえは獲物によって成長する。雄獅子のように、雌獅子のように、うずくまり、身を伏せる。だれがこれを起こせるだろうか。

49:10 王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。

49:11 彼は自分のろばをぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ。彼は自分の衣をぶどう酒で、衣服をぶどうの汁(血)で洗う。

これはヤコブすなわちイスラエルの四男ユダについての預言です。彼の子孫すなわちユダ族の系図からイエシュアはお生まれになりました。ですからこの預言は直接的にイエシュアを指し示すものです。彼は自分の「衣をぶどう酒…ぶどうの汁(血)で洗う」とあり、ここに聖書で最初のレブーシュがあります。本来、衣をぶどうの果汁、あるいは人の血液に浸せばそれは赤く(赤黒く)なりますが、イエシュアの血はこれを白くします。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:13 すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

7:14 そこで私が「私の主よ、あなたこそぞ存じます」と言うと、長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

この黙示録7章はイスラエルの十二部族と、そして「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆」すなわち異邦人が「子羊」すなわちイエシュアの御前に集められることが預言されている箇所です。やがてイスラエルも、そして私たち異邦人の教会もみな神の「子羊」であられるイエシュアの御前に集められ、「その衣を洗い、子羊の血で白くした」という「白い衣を身にまと」うことになるのです。その事実がイエシュアの「その衣は白く光り輝いた」という出来事には指し示されているのです。私たち教会は、ただ子羊イエシュア、イエス・キリストとも呼ばれるこの御方の血によってきよめられ、救われるのですが、この黙示録7章に示されているように、その前には必ずイスラエル十二部族という存在が置かれていることを覚えなければなりません。彼らにつながる、連なることによるのみ、私たちの「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある」ことを忘れてはならないのです。やがて私たち教会は、携挙により、短い期間とはいえ、この地上からその存在が見えなくなります。しかし彼らイスラエル、ユダヤ人とも呼ばれるこの存在が、地上から消え失せることは、一瞬たりとしてなく、そしてたとえすべての国々が、全世界が滅びようとも、イスラエルは永遠に存在し続ける、まさに神の選びの民、決して滅ぼし尽くされることのない不滅の民、復活の民なのです。ですからこの民イスラエルにつながるならば、私たち異邦人もみな永遠不滅の存在として、子羊イエシュアの御前に立ち続けることができるのです。そのような事実が、神のご計画がこの「衣は白く光り輝いた」という事実には指し示されているのです。ハレルヤ！

#### 4. モーセとエリヤ

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:30 そして、見よ、二人の人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤで、

9:31 栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。

ここに突如として「モーセとエリヤ」が登場します。しかもここは山の上、彼らを結ぶ山といえればそれはホレブの山とも呼ばれるシナイ山です。モーセはここで主と語り合い、十戒とも呼ばれる契約の言葉が記された石の板を授かり、エリヤもこの山の上で主の御声を聞きました（I列王記 19:8）。実際地理的に

イエシュアと三人の弟子たちが登った山はヘルモン山であったと考えられますが、筆者ルカはそれを明記せずただ「山」とだけ記し、この二人の預言者の存在からシナイ山を指し示すようにしています。しかし彼らがイエシュアと話している内容はシナイ山でのことではなく、別の「山」のことであり、それはシオンの山「エルサレム」のことです。後に使徒パウロがこのように記しています。

#### ガラテヤ書【新改訳 2017】

4:22 アブラハムには二人の息子がいて、一人は女奴隷から、一人は自由の女から生まれた、と書かれています。

4:23 女奴隷の子は肉によって生まれたのに対し、自由の女の子は約束によって生まれました。

4:24 ここには比喩的な意味があります。この女たちは二つの契約を表しています。一方はシナイ山から出ていて、奴隷となる子を産みます。それはハガルのことです。

4:25 このハガルは、アラビアにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります。なぜなら、今のエルサレムは、彼女の子らとともに奴隷となっているからです。

4:26 しかし、上にあるエルサレムは自由の女であり、私たちの母です。

これはイスラエルとそれにつながる異邦人の教会について説いた「比喩的な意味」を持った御言葉です。ここで彼は「シナイ山のことで、今のエルサレムに当たります」と言って、今のエルサレム、地上のエルサレムをシナイ山にたとえています。ここでパウロは「上にあるエルサレム」の存在を指し示しています。イエシュアがモーセとエリヤと話しておられたのは「今のエルサレム」についてのことでしょうか、それとも「上にあるエルサレム」すなわち神のご計画の終わり、完成としてのエルサレムについてでしょうか。イエシュアが初めからつねに「神の国」の完成、終わりについて語っておられることを考えるならば答えは明らかです。イエシュアはご自分が十字架にかかって死ぬことを語っているではありません。もしそうならモーセとエリヤにそれと何の関わりがあるのでしょうか。十字架の死と復活はイエシュアがただお一人でなされた御業です。ではモーセとエリヤはイエシュアから何を命じられているのでしょうか。

ちなみにモーセとエリヤはイエシュアに何かを伝えに来たものではありません。イエシュアからその御言葉、ご命令を聞くために現れたのです。なぜなら後述しますが「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」という御言葉があるからです。つまり彼ら二人の預言者は、神のご計画のための働きをなすためにイエシュアのご命令を受けて遣わされるということです。その働きとは以下の預言の成就です。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」

11:4 彼らは、地を治める主の御前に立っている二本のオリーブの木、また二つの燭台である。

11:5 もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、彼らの口から火が出て、敵を焼き尽くす。もしだれかが彼らに害を加えようとするなら、必ずこのように殺される。

11:6 この二人は、預言をしている期間、雨が降らないように天を閉じる権威を持っている。また、水を血に変える権威、さらに、思うままに何度でも、あらゆる災害で地を打つ権威を持っている。

これは世の終わりに現れる「**二人の証人**」についての預言です。読んでの通り、彼らの働きは常人では成しえない驚異的なものばかりです。しかしかつてこれとおなじようなことをやってのけた二人の預言者がいました。それがこのモーセとエリヤなのです。かつてモーセはエジプトとファラオの家を十の災いと呼ばれる天変地異で滅亡寸前にまで打ちのめしました（出エジプト 7～13 章）。一方エリヤは北イスラエルの王アハブの時代に三年の間、地上に雨も露も降らないようにしました（I 列王記 17:1）。さらに天から火を下してアハズヤの兵隊を焼き尽くしたという記述もあります（II 列王記 1:10～12）。聖書の中でこのような凄まじい、激しい神の御業を行う権威を委ねられた者は彼ら以外にはいません。さらに彼らはどちらも普通の死を通ることなく地上を去った者たちです。モーセは死んだが目もかすまず衰えず、その墓、遺体を見た者はいない（申命記 34:5～7）とあり、エリヤにいたっては、竜巻に乗って天に上って行った（II 列王記 2:11）とあるからです。その働きも、その最後もすべて常識外れな彼らをおいて、この終わりの時代に現れ、この預言を成就するにふさわしい「**二人の証人**」は他にありません。彼らはイエシュアから、終わりの日にエルサレムにおいて成就させるこれらの預言について聞くためにここに現れた、召し出されたのです。これは聖書を聖書で解き明かした結論です。

## 5. 三つの幕屋

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:32 ペテロと仲間たちは眠くてたまらなかったが、はっきり目が覚めると、イエスの栄光と、イエスと一緒に立っている二人の人が見えた。

9:33 この二人がイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。「先生。私たちがここにいることはすばらしいことです。幕屋を三つ造りましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために。」ペテロは自分の言っていることが分かっていなかった。

ここでペテロ、ケファが口を開きます。しかし彼は「**自分の言っていることが分かっていなかった**」とあります。これを多くの場合、人の無知で軽率な言動と解釈します。お調子者のそそっかしいペテロの失敗談であると。しかしこれは聖書に記されたものです。神の御言葉である聖書にそのような文言が記録されることがあるでしょうか。何より聖書は神の御言葉の預言書です。預言とは後に起こること、まだ見たことのない、知らない、まだわからない出来事について記したもののなのです。かつて預言者イザヤは見たこともない、まだ生まれてすらいない王キュロスを名指しで預言し（イザヤ 45:1）、同様にインマヌエルと呼ばれるイエシュアを預言しました（イザヤ 7:14）。ここでケファは名前は知っていても見たこともない旧約時代の人物であるモーセとエリヤを見てどうしてそれが彼らだと分かったのでしょうか、いいえ、分からなかったのです。「**自分の言っていることが分かっていなかった**」とはっきり記されているとおりです。しかし彼は自分の言っていることが分からないまま預言させられたのです。ですからここでの彼の発言は、まぎれもなく預言であると捉えるべきです。そしてここで彼はイスラエルの民が建てた、また建てることになる三つのエルサレムの神殿を預言したのです。すなわちソロモンが建てた第一神殿、ゼルバベルが建てた第二神殿、そしてやがて建てられる第三神殿、これらはすべてエルサレムに建てられます。エルサレムについて話しているイエシュアと二人の預言者を見てケファは語った、預言したのです。それが

エルサレムと無関係であるはずがありません。神のご計画はつねにイスラエルの民と、彼らの家と呼ばれるエルサレムの神殿とともにあります。このイスラエルの民とエルサレムを見ることで、今神のご計画はどの段階にあるか、どこまで進んでいるのかを目視できるのです。第三の神殿がエルサレムに建つその時、神のご計画はその最終段階に突入します。私たちは今、その直前の時代に生かされているのです。時は確実に近づいているのです。自分の身の回りのことや、ネットニュース、フェイクニュースに踊らされている場合ではないのです。

## 6. イエシュアだけ

### ルカの福音書【新改訳 2017】

9:34 ペテロがこう言っているうちに、雲がわき起こって彼らをおおった。彼らが雲の中に入ると、弟子たちは恐ろしくなった。

9:35 すると雲の中から言う声がした。「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」

9:36 この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけであった。弟子たちは沈黙を守り、当時は自分たちの見たことをいっさい、だれにも話さなかった。

「弟子たちは恐ろしくなった」とあります。大患難と呼ばれる、恐るべき時代がやってくるのがここに暗示されているようです。どうか「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」と言われているように、「イエスだけ」ただイエシュアだけを、その御言葉だけを聞いてまいりましょう。他はすべてまやかし、偽り、敵の言葉です。イエシュアの御言葉、それは耳障りの良い、受け取りやすい、理解しやすいものではありません。まるでそれは戦争で味方にのみ理解できるように組まれた暗号のようであり、また選ばれた弟子にのみ渡される免許皆伝のような、隠された、秘められた奥義、「神の国の奥義」なのです。簡単に理解できるものでも、気軽に伝えられるものでもありません。実際にイエシュアご自身もこれをすべてたとえて話され、弟子たち以外にその奥義を伝えることはありませんでした。ですから今日ここに解き明かされている事実を、奥義を、宣べ伝えることよりも自分もの、自分に与えられたギフトとして受け取り、味わい、咀嚼し、反芻してください。それは語ることより「彼の言うことを聞け」ということの方がはるかに重要なことであることを示した御言葉がこの「弟子たちは沈黙を守り、当時は自分たちの見たことをいっさい、だれにも話さなかった」という御言葉に指し示された、私たちに対するメッセージ、命令です。

そして何より「これはわたしの選んだ子。彼の言うことを聞け。」という御言葉は、「神の国」におけるその統治、支配形態の「型」です。今は情報が氾濫し、多くの人が様々な見解を述べ、聞く側の人々も自分の聞きたい言葉、知りたい情報を自分の聞きたいように聞いています。「神の国」ではこれが一本化されます。まさに「この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけ」とあるように、ただイエシュアだけが、その御声、その御言葉だけが発せられ、伝えられ、聞かれ、ことが成される世界となります。もはや誰の声にも惑わされることもない、偽りを言うサタンは退けられ、その声すら聞こえない、ただイエシュアの御言葉だけが聞こえる世界。ただ主の御声が全地に響き渡る世界。待ち望みましょう、慕い求めましょう、呼び求めましょう、そのような「神の国」を、そしてその御国を建てられる主イエシュアの再臨を。